

# 大学体育における知識・能力の形成 (4)

— スポーツ文化を総合的に教える授業の検 —

則元志郎・西田明史\*<sup>1</sup>・笠井妙美\*<sup>2</sup>・柿原一貴\*<sup>3</sup>・中熊芳子\*<sup>4</sup>

## The Acquisition of Knowledge and Ability Through University Physical Education

— A Study of Classes for Comprehensive Teaching of Sports Culture —

Shiro NORIMOTO, Akihito NISHIDA, Taemi KASAI,  
Kazutaka KAKIHARA and Yoshiko NAKAGUMA

### I. 緒言

大学設置基準の大綱化(1991)以降, 各大学では保健体育の成立根拠が問われていくことになった。全国体育連合でも必修科目の根拠となる大学体育実践を提案していく(全国体育連合, 1995)。やがて体育問題の議論は停滞していくが, 選択科目となった大学でも体育受講者が激減することはなく, 最近では大学生の心身の健全な発達, 健康問題に体育が有効とする実践研究(橋本ほか, 2008)も報告され, 大学体育が全国的に見直されつつある。

一方, 大学全入時代を迎え, 入学時の低学力化が, 深刻な問題として多くの大学で認識されている(石井ほか, 2005; 石井ほか, 2007; 私立大学情報教育協会, 2008)。

体育における低学力化(森, 1999; 丸山, 2002)は, 大学体育にも影響していて, 大学体育は初年次配当がほとんどであるため深く関与している。初年次教育および補習教育を視野に入れて大学入学時の小・中・高校までの目標達成度に目を向けてみると, その達成度の高低により高校までや大学体育の教育内容が異なってくるはずである。高校までの目標・内容の再構成が必要とも考えられるし, 大学では不足分の補足あるいは包含した内容の再構成が必要でもある。

筆者らは2008年より「大学体育における知識・能力の形成」をテーマに継続研究を行っている。まず, 実態調査を実施し, 大学入学時における保健体育教科の知識・実践力を分析した。実態調査から導出された大学体育の課題は, 全般的な補習教育の必要性および生涯スポーツ, 技術・戦術, 文化的総合性, 体力などを教科内容として設定すべきかどうかの検討であった。

これらの課題を基に教科内容を設定し, 実験的实践により習得可能性および教科内容としての可能性を検討しなければならない。

そこで本研究では, 総合的文化としてのスポーツの構成要素を教科内容として設定し, 教材と関わらせながら学ぶ実験授業を行い, 大学体育の教科内容としての可能性を検討した。教科内容として設定した構成要素は, 体育・スポーツに関わる①発生・伝播・普及, ②ルール史, ③ウェアとファッション, ④技術戦術史, ⑤施設・用具の変遷, ⑥組織・運営, ⑦行財政と権利, ⑧ライフスタイルの8つの構成要素である。

### II. 方法

#### 1. 実験授業対象者とデータ収集の方法

本研究の対象は, 熊本県K大学に2009年度に入学した学生49名(男性34名, 女性15名)であった。

知識・実践力に関わる調査および技能測定は, 2009年度の前期授業の1回目(2009年4月中旬)および15回目(2011年7月下旬)の2回実施した。体育・スポーツおよび生活・健康に関する知識と実践力の調査は,

\*1 西九州大学    \*2 東海大学    \*3 尚絅大学    \*4 平成音楽大学

質問紙を用いた集合調査法で実施した。倫理的配慮として、回答の内容が成績評価に影響を一切及ぼさないことを調査表の中に明記した。調査は、調査への同意を得られた者のみ実施した。また、テニスの基礎技能の調査は、ゲームの中で主に用いる個人的技能を測定した。

なお、分析は、各項目のいずれかに欠損値のある者を除外した46名（男性31名、女性15名）を対象とした。

## 2. 実験授業期間

授業期間は実践群、統制群ともに2011年4月から7月までの90分授業の15回である。

## 3. 実験授業の概要

対象の授業は、2009年度前期に開講された教養教育における選択科目の体育授業であった。

授業概要を表1に示した。授業内容は大きく「技術的内容」と「テニス文化とスポーツの総合的文化内容」で構成されている。

「技術的内容」は、約6人の8班で構成された各グループが自主的に課題を設定し、教員と相談しながら、各班の課題を解決していく学習形態がとられた。全体としての目標はテニスの基礎技能を習得すると同時に、ダブルスのゲームが楽しめる程度の技能や戦術の習得である。

また、「技術的内容」の学習に並行して演習形式で「テニス文化とスポーツの総合的文化内容」を組み込まれた。大まかに隔週にわたってテニスコートまで3分程度で移動できる教室において授業前半（約20分）に各担当班によるプロジェクターや資料等を用いたプレゼンテーション、質疑・応答、さらには教員による補足説明（テニス文化に関わらせながらスポーツ全体を総合的に説明）が行われた。

表1 授業実践概要（2009年4月～7月）

時限	月/日	技術学習の計画・運営	テニス文化と総合的文化内容（演習） ①以下のテーマをグループで調査・発表 ②教師が文化総合的に補足 （テニス→ネット型→スポーツ全般）
1	4/10	ガイダンス	
2	4/17	技能・ゲーム測定・記録・分析①	テニス文化に関わらせながら総合的に学習することの説明
3	4/24	グループ学習の内容と方法	
4	5/01	技術内容と方法の学習 [グループの内容作成準備]	
5	5/08	グループ学習① [計画・運営]	(1) 発生・伝播・普及
6	5/15	グループ学習②	
7	5/22	グループ学習③	(2) ルール史
8	5/29	グループ学習④	(3) ウエアとファッション
9	6/05	グループ学習⑤	(4) 技術戦術史
10	6/12	グループ学習⑥	(5) 施設・用具の変遷 [公共施設と民間施設の実態]
11	6/19	グループ学習⑦	
12	6/26	グループ学習⑧	(6) 組織・運営 [学校・地域のクラブ～世界の組織]
13	7/03	戦術発表会	(7) 行財政と権利 [スポーツ政策とテニス愛好者の要求]
14	7/10	技能・ゲーム測定・記録・分析②	
15	7/17	学習の総括	(8) ライフ・スタイル（スポーツ権） [国内・外比較、金・暇・場所]

## 4. 調査と測定

### 1) 体育・スポーツ・健康に関する知識と技能の調査・測定

調査内容は、保健体育教科の人文・社会・自然科学領域に関する31項目、保健・健康・体力領域に関する17項目、運動・スポーツ実践に関する25項目、大学体育で受講した教材に関する8項目であった。質問項目の設定にあたり、則元ほか（2009）の「大学生の体育・スポーツおよび生活・健康の知識と実践に関する調査表」を参考にした。作成した質問項目については、大学体育授業に携わる4名の教員によって表現の適否について内容の妥当性の検討を行った。

人文・社会・自然科学領域に関する調査では、4段階評定（「知らない」「用語だけを知っている」「一般的に説明できる」と「専門的に説明できる」）による回答を求めた。また、体力・健康、保健・スポーツ実践、受講教材の習得度の調査では、5段階評定（「知らない」「用語だけを知っている」「説明できるが実践できない」「説明できないが実践できる」「説明も実践もできる」）による回答を求めた。

## 2) テニスの基礎技能の測定

調査内容は、ゲームにおいて主に用いる個人的技能のうち、フォアハンドストロークにおけるストレートショットとクロスショット、バックハンドストロークにおけるストレートショットとクロスショット、フォアハンドボレーのクロスショット、バックハンドボレーのクロスショットの6項目を設定した。なお、各基礎技能の習得度は、5回の試技のうちの成功回数により求めた。

## 5. 分析

表2に示すとおり知識および技能の程度を3つの習得度レベルに分類した。体育理論に関する知識の程度については、「知らない」を「無識」、「用語だけを知っている」を「用語説明」、「一般的に説明できる」と「専門的に説明できる」を統合して「説明可能」に分類した。体力・健康、運動・スポーツ実践、受講教材に関する知識と技能の程度については、「知らない」を「無識」、「用語だけを知っている」を「用語説明」、「説明できるが実践できない」「説明できないが実践できる」「説明も実践もできる」の3つを統合して「説明・実践」に分類した。

表2 習得度レベルの分類

習得度レベル	「体育理論」	「生活・健康」「スポーツ実践」 「教材」
無 識	知らない	知らない
用語説明	用語だけは知っている	用語だけは知っている
説明可能	一般的に説明できる 専門的に説明できる	—
説明・実践	—	説明できるが実践できない 説明できないが実践できる 説明も実践もできる

## Ⅲ 結 果

### 1. 総合的な諸領域における知識・実践力の習得

本実験授業の主要な目的は、体育・スポーツに関わる総合的文化内容の獲得である。そこで、体育・スポーツ分野全般に関わる人文科学領域、社会科学領域、自然科学領域の3つの領域、体力・健康等に関わる体力、健康、保健の3つの領域、さらに体育・スポーツ実践に関わって個人種目領域、集団種目領域、武道・表現領域の3つの領域、合計9つの領域における内容の用語説明や実践がどの程度可能かを事前と事後において分析した。総合的文化内容は多領域にわたるため、それらのすべてに対して実践可能レベルを目標とすることは不可能に近いため、ここでは用語説明レベルまでも含めて分析および一般授業との比較分析を行うこととした。

#### (1) 人文科学領域の習得

人文科学領域の習得に関して図1に示している。

人文科学領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の10.9%に対して受講後で23.4%であった。10ポイント以上の伸びを示し、2倍以上習得されてことを示している。一般的な大学体育でも同様に20%以上は習得されているので、特に本実験授業が高いとはいえない。ただ、用語に関して説明できるレベ

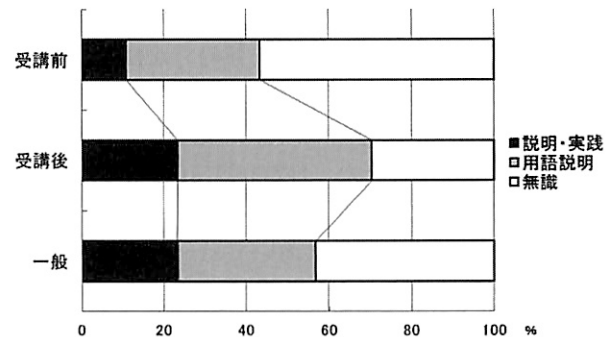


図1 受講前後の変化（人文科学領域）

ル（用語説明）までをみると、一般的大学体育授業は60%以下に対して、本実験授業は70%との習得を示している。また、伸びは受講前の32.3%に対して受講後では47.0%となり、約15ポイントの伸びを示している。これから、本実験授業は一般大学体育授業よりも人文科学領域で多くのことを学んだといえる。

## (2) 社会科学領域の習得

社会科学領域の習得に関して図2に示している。

社会科学領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の14.3%に対して受講後で22.9%であった。10ポイント近くの伸びを示し、2倍近く習得されてことを示している。一般的大学体育授業では約20%なので、やや本実験授業群の方が高い値を示している。「用語説明」レベルまでをみると、一般的大学体育授業は約50%に対して、本実験授業は65%以上の習得を示している。また、伸びは受講前の30.1%に対して受講後で41.6%となり、約10ポイントの伸びを示している。

これから、本実験授業は一般大学体育授業よりも社会科学領域で多くのことを学んだといえる。

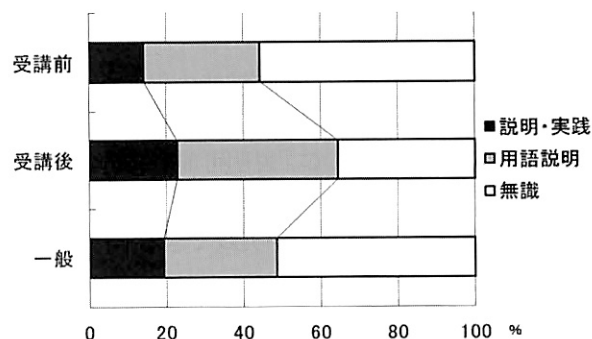


図2 受講前後の変化（社会科学領域）

## (3) 自然科学領域の習得

自然科学領域の習得に関して図3に示している。

自然科学領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の18.0%に対して受講後で24.3%であった。わずかだが約6ポイントの伸びを示し、多少多く習得されてことを示している。一般的大学体育授業では約20%なので、やや本実験授業群の方がわずかだが高い値を示している。「用語説明」レベルまでをみると、一般的大学体育授業は50%以下に対して、本実験授業は65%以上の習得を示している。また、伸びは受講前の32.4%に対して受講後で46.9%となり、約15ポイント近くの伸びを示している。

これから、本実験授業は一般大学体育授業よりも社会科学領域で多くのことを学んだといえる。

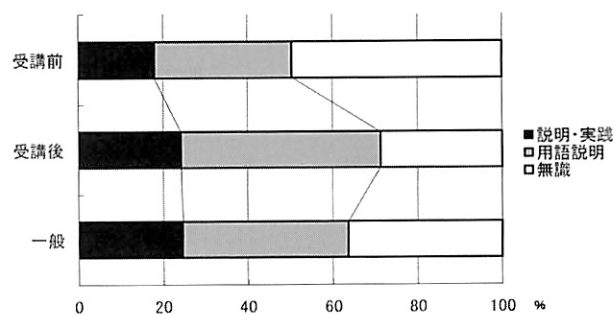


図3 受講前後の変化（自然科学領域）

## (4) 体力領域の習得

体力領域の習得に関して図4に示している。

体力領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の24.3%に対して受講後で31.3%であった。わずかだが約7ポイントの伸びを示し、多少多く習得されてことを示している。一般的大学体育授業では約40%なので、一般大学体育授業群の方が高い値を示している。用語説明レベルまでをみると、一般的大学体育授業は70%以上に対して、本実験授業は70%以下の習得を示している。また、伸びは約10ポイント近くの伸びを示している。

これから、体力領域においては一般大学体育授業の方が本実験授業よりも若干多くのことを学んでいるといえる。

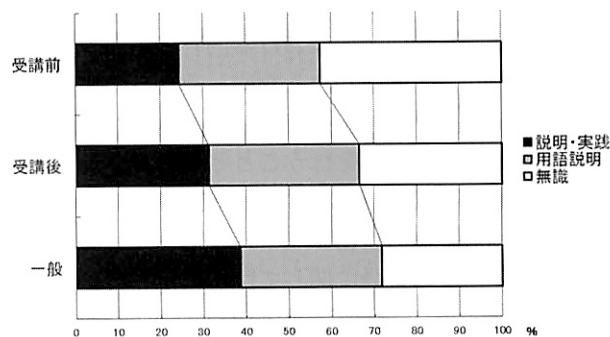


図4 受講前後の変化（体力領域）

### (5) 健康領域の習得

健康領域の習得に関して図5に示している。

健康領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の23.6%に対して受講後で27.5%であった。わずかが約4ポイント程度の伸びで、多く習得されたとはいえない。一般的大学体育授業では35%以上なので、一般大学体育授業群の方が高い値を示している。用語説明レベルまでをみると、一般的大学体育授業は70%に対して、本実験授業は約60%の習得を示している。また、伸びは約10ポイント近くの伸びを示している。

これらから、健康領域においては一般大学体育授業の方が本実験授業よりも多くのことを学んでいるといえる。

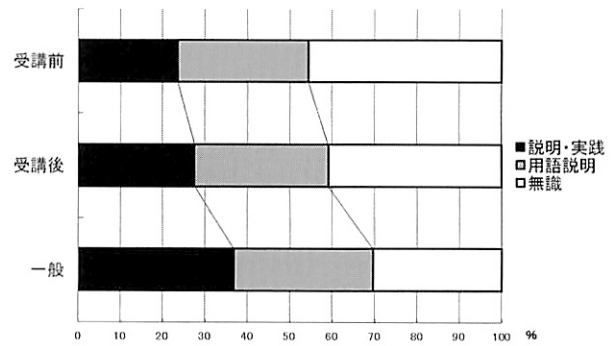


図5 受講前後の変化 (健康)

### (6) 保健領域の習得

保健領域の習得に関して図6に示している。

健康領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前が25.4%であったのに対して受講後が29.8%であった。わずかが約4ポイント程度の伸びで、多く習得されたとはいえない。一般的大学体育授業では40%以上なので、一般大学体育授業群の方が高い値を示している。用語説明レベルまでをみると、一般的大学体育授業は約80%に対して、本実験授業は約65%の習得を示している。また、伸びはほんのわずかである。

これらから、保健領域においては一般大学体育授業の方が本実験授業よりも多くのことを学んでいるといえる。

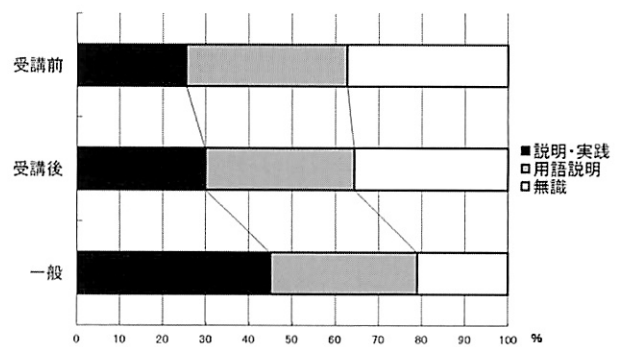


図6 受講前後の変化 (保健領域)

### (7) 個人種目領域の習得

前項目までは一般的大学体育授業との比較を行ってきたが、多くの大学の大学体育では1つの種目に限定して授業が行われることが多く個人、集団、武道・表現の全般に関して調査することはできないので、この項目以降は個人、集団、武道・表現領域に関して一般大学体育授業との比較は行わない。

個人種目領域の習得に関して図7に示している。

個人種目領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の20.7%に対して受講後で27.4%であった。わずかが約7ポイントの伸びを示し、多少習得されてことを示している。「用語説明」レベルまでみると8ポイントほどの伸びを示している。個人種目の知識・実践等を対象として種目は体操競技、陸上、水泳であり、今回の受講教材であるテニスは含まれていない。

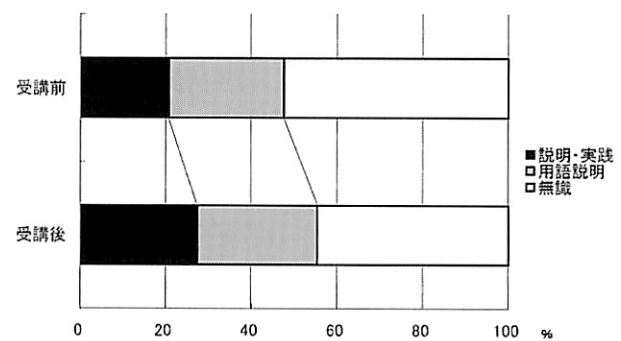


図7 受講前後の変化 (個人種目領域)

### (8) 集団種目領域の習得

集団種目領域の習得に関して図8に示している。

集団種目領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の22.6%に対して受講後で27.4%であった。わずかが約5ポイントの伸びを示し、多少習得されてことを示している。「用語説明」レベルまでみて

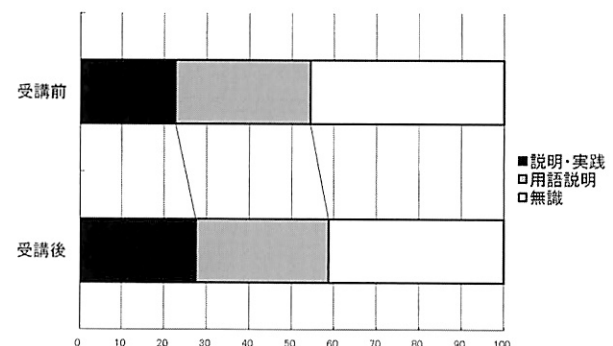


図8 受講前後の変化 (集団種目領域)

も伸びは変わらず、「説明・実践可能」レベルの値が全体の増加となっている。

### (9) 武道・表現領域の習得

武道・表現領域の習得に関して図9に示している。

武道・表現領域において「説明・実践可能」レベルをみると受講前の7.9%に対して受講後で11.1%であった。わずかだが約3ポイントの伸びを示し、多少習得されてことを示している。「用語説明」レベルまでみると約10ポイントの伸びを示していた。何も知らない「無識」レベルは、この武道・表現領域が最も高く授業前では約80%であった。ただし、授業後では約10ポイント減少し、「無識」レベルは70%であった。

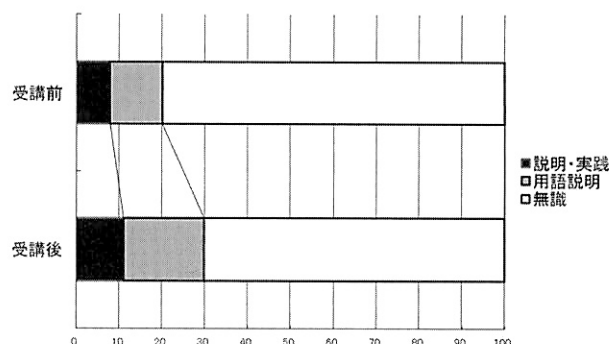


図9 受講前後の変化（武道・表現領域）

### (10) 受講教材の習得

受講教材（テニス）の習得に関して図10に示している。

ここでは①基本技術や戦術、②ルールや審判法、③企画や運営法（試合）、④用器具の使用法や管理法、⑤守備陣形、⑥コンビネーションプレー、⑦ゲームの組み立て方、⑧フォーメーションの8項目について「説明・実践」「用語説明」「無識」のどのレベルにあるのか回答を基にグラフ化したものである。

「説明・実践可能」レベルをみると受講前が14.7%であったのに対して受講後が32.6%であった。約18ポイントの伸びを示し、かなり習得されたといえる。一般的大学体育授業では40%以上なので、一般大学体育授業群の方が高い値を示している。用語説明レベルまでをみると、一般的大学体育授業は約70%に対して、本実験授業は約62%の習得を示した。

これらから、受講教材に関して本実験授業群はかなりの伸びを示したが、一般大学体育授業の方が修得の度合いが高かった。

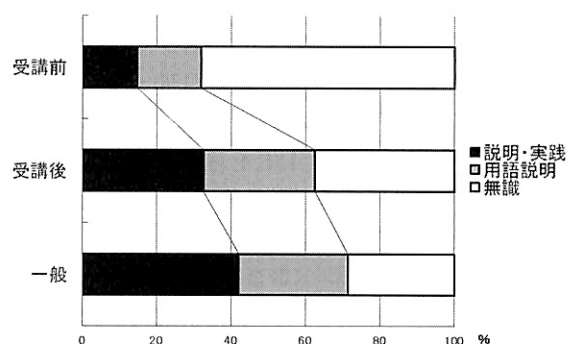


図10 受講前後の変化（受講教材）

## 2. 受講教材（テニス）に関わる知識と技能の習得

テニスの技能テストは、図11に示している。テニスのゲームにおいて主に用いる個人的技能のうち、フォアハンドストロークにおける①クロスショットと②ストレートショット、バックハンドストロークにおける③クロスショットと④ストレートショット、⑤フォアハンドボレーのクロスショット、⑥バックハンドボレーのクロスショットの6項目を設定した。各技能の習得度は、5回の試技のうちの図中の灰色エリア内への成功回数により求めた。

### (1) 技能全体における授業前後比較

技能テストにおいて男女間にかなり異なる結果が出たので、男女別に授業前後の比較を行う。男女間の違いは目的ではないので、行わない。

また、今回使用したストロークやボレーのテストは一般的ではあるが、得点基準となる資料を見出すことができなかった。そこで、授業クラスに含まれる3年以上の経験者の得点を100点とし、それに対する割合を求めて、技能レベルの基準とした。つまり、経験者と同得点であれば100点とし、3年程度のレベルにある判断した。

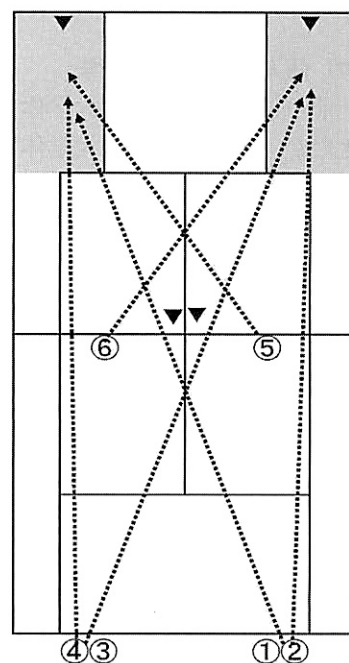


図11 テニス スキルテスト（ストロークとボレー）

- ① FHSic：フォアハンドストローク・クロス
- ② FHSis：フォアハンドストローク・ストレート
- ③ BHSic：バックハンドストローク・クロス
- ④ BHSis：バックハンドストローク・ストレート
- ⑤ FHVc：フォアハンドボレー・クロス
- ⑥ BHVc：バックハンドボレー・クロス

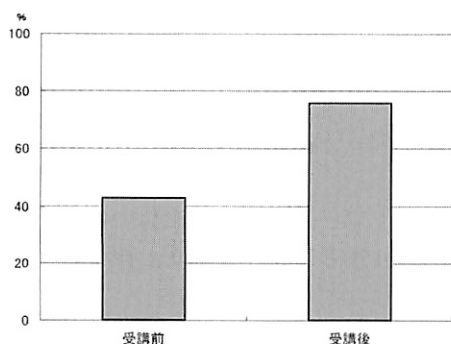


図12 初心者の技能得点の対経験者比 (男子)

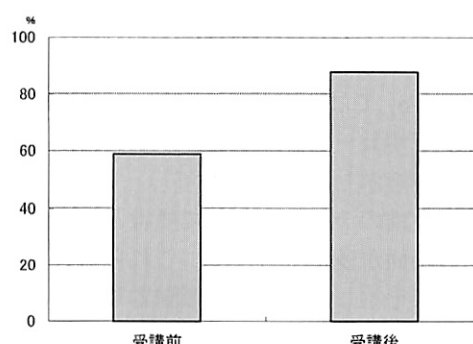


図13 初心者の技能得点の対経験者比 (女子)

男子の技能得点の対経験者比を図12に示している。

授業前では約43点であったが、授業後では76点を示し、33ポイントの伸びを示した。男子経験者レベルの約75%近くに達していた可能性があるかと判断できる。

女子の技能得点の対経験者比を図13に示している。

授業前では約60点であったが、授業後では88点を示し、28ポイントの伸びを示した。女子経験者レベルの約90%近くに達していた可能性があるかと判断できる。

全体として男女とも経験者比でみるかぎり、かなり技能が高まったといえる。

## (2) 各技能における授業前後比較

ここでも、男女別に経験者との比で結果をみることにする。

男子の技能得点の対経験者比を図14に示している。

フォアハンドストローク・クロス (FHSIC) では、授業前では約59点であったが、授業後では約84点を示し、25ポイントの伸びを示した。フォアハンドストローク・ストレート (FHSIS) では、授業前では約32点であったが、授業後では約67点を示し、35ポイントの伸びを示した。バックハンドストローク・クロス (BHSIC) では、授業前では約35点であったが、授業後では約74点を示し、39ポイントの伸びを示した。バックハンドストローク・ストレート (BHSIS) では、授業前では約46点であったが、授業後では約84点を示し、38ポイントの伸びを示した。フォアハンドボレー・クロス (FHVc) では、授業前では約44点であったが、授業後では約78点を示し、34ポイントの伸びを示した。バックハンドボレー・クロス (BHVc) では、授業前では約42点であったが、授業後では約70点を示し、28ポイントの伸びを示した。

男子はどの技能においても確実な伸びを示し、経験者のレベルに近づいているといえる。

女子の技能得点の対経験者比を図15に示している。

フォアハンドストローク・クロス (FHSIC) では、授業前では約80点であったが、授業後では約84点を示し、わずか4ポイントの伸びを示した。フォアハンドストローク・ストレート (FHSIS) では、授業前では約97点であったが、授業後では約73点を示し、経験者を24ポイントも越えていた。これは、経験者がコースを狙いすぎてミスショットがかなり多かったためである。バックハンドストローク・クロス (BHSIC) では、授業前では約100点であったが、授業後では約73点を示し、経験者を27ポイントも越えていた。これも、経験者がコー

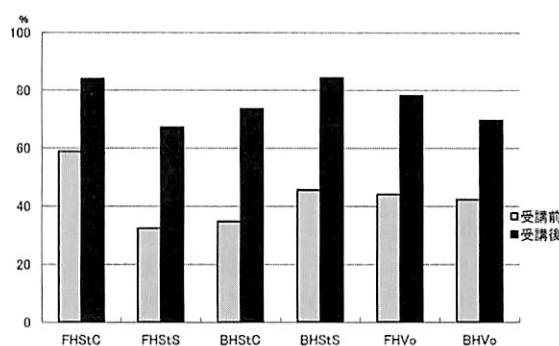


図14 初心者の各技能における得点の対経験者比 (男子)

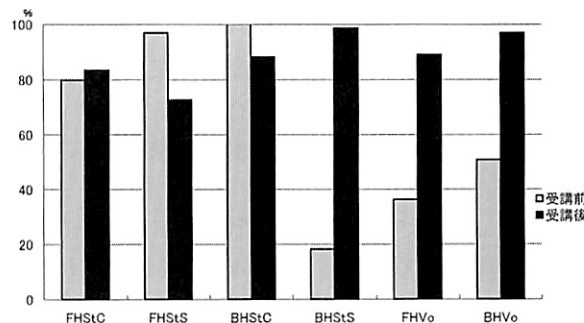


図15 初心者の各技能における得点の対経験者比 (女子)



スを狙いすぎてミスショットがかなり多かったためである。バックハンドストローク・ストレート(BHStS)では、授業前では約19点であったが、授業後では約99点を示し、80ポイントの伸びを示した。フォアハンドボレー・クロス(FHVo)では、授業前では約37点であったが、授業後では約89点を示し、52ポイントの伸びを示した。バックハンドボレー・クロス(BHVo)では、授業前では約51点であったが、授業後では約97点を示し、46ポイントの伸びを示した。

女子は授業前のテストにおいて順番として最初の方にテストされたストロークでコースを狙いすぎてわずかにアウトする場面が多かったため、これらのショット技能に関してはあまり参考にならないが、後半のボレー等はいくらかの伸びを示し、ほとんど経験者レベルに達するくらい技能が向上したといえる。

#### Ⅳ 考 察

##### 1. 総合的文化内容について

本実験授業の主要な目的は、スポーツ文化が総合的に学ばれることである。そこで、体育・スポーツ分野全般に関して人文科学領域、社会科学領域、自然科学領域に関する内容の用語説明や実践がどの程度可能かを事前と事後において分析した。また、他大学で行われた一般的な教養体育の授業と比較分析も行った。その結果、人文、社会、自然のどの領域においても用語説明レベルは明らかに増加を示した。また、一般授業と比較しても明らかな差があった。

これらのことから、実験授業において教科内容として構成した総合的文化内容は獲得されていると推測できる。出原(1999)は、1998年改訂学習指導要領を分析し「自然科学的内容だけが求められており、文化的、社会科学的内容が欠落している」と述べている。また、菊(1999)は「スポーツの歴史や文化を学ぶ意義は、実技学習を自分たちの適性や能力に応じた学習内容に再構成していく力を養うところにある」と述べている。これらのことから「人文科学的内容」あるいは「社会科学的内容」を学習することが必要と考えられ、本実験授業による「人文科学領域」「社会科学領域」での用語説明レベル向上は重要なことである。

さらにスポーツ文化の総合的な学習に関わって、伴(2005)は「これからの大学体育は、身体運動文化こそが人間と生活世界との関わりを結節させるものという視点に立ち、人間力を涵養する付加価値を追求する学習でなければならない」と述べ、松岡(1999)は「保健体育教科で学んだことが大学全体のカリキュラムの中で意味を持ち、他の教科と関連させたり発展させたりすることも必要である」と述べている。これらの主張は、まさに総合的に学ぶことの重要性を示唆するものである。スポーツ文化の総合性に関わって中村(1997)は「人間的なスポーツの享受形態を創出・発展・変革するという目的意識的・人間中心的必然を根拠とする文化変革論的必修論」を主張している。したがって、大学体育において運動技能の高めかたを学習するとき、運動技術の構造や上達過程、ルールや戦術の理解もさることながら、歴史的に構築された文化的・社会的価値などを理解することも必要であるといえる。

また、則元ら(2009)による調査結果による高校までに学ぶべき体育の内容の20～30%程度しか新入生は習得していない。特に「人文科学的内容」および「社会科学的内容」の習得は低いという報告からもスポーツ文化を総合的に学習することは大学体育の課題でもあり、本実験授業の結果はすべてではないにしても課題解決を示唆するものである。

同時に、高校までの習得内容を補足する、すなわち補習教育も担っていることになる。この点は、文部科学省(2008)が報告している「全国の約71%の大学において初年次教育が導入され、全国的に重要な問題として検討され始めている」とことと同様な課題を有しており、大学全入時代に突入した学力保障の流れとも符合する。

一般的なスポーツ教材に関わって考察してみると直接の受講教材(テニス)そのものにおける用語説明とその実践のレベルは本実験授業において事前と事後を比較すると増加傾向を示してはいるものの、一般大学体育授業と比較するとわずかに低いレベルであった。これは、直接の教材から学ぶことより他領域にわたって広く、浅く学んだ可能性を示唆している。その表れとして対象種目にテニスが含まれていないにもかかわらず個人、集団種目領域において若干ではあるが増加している。さらにはほぼ「無識」レベルであった武道・表現領域は「無識」が10ポイントも減少している。これらは、テニスと関わらせながら様々なスポーツの文化内容等の説明がなされたからと推察される。

ただし、健康・体力・保健に関しては本実験授業の内容として関わることはなく、低い値を示した。これらに



関しては「保健体育理論（講義）」で補足する必要があると思われる。

## 2. 技能の習得について

体育・スポーツの文化的総合性が学ばれたとしても、直接の教材に関わる技能が修得されていなければ体育授業としては成立しない。

テニスの技能テスト（ストローク、ボレーのフォアハンドとバックハンド計6種）の結果を男女別に分析した。技能レベルは、受講生中の3年以上の経験者を100とした場合の割合として示したうえで、男子は受講前に経験者比の約40%程度であったものが約80%近くまでに向上した。女子は受講前に経験者比の約60%程度であったものが約90%近くまでに向上した。

これらのことから、テニス技能は確実に向上したことがいえる。テニス教材の受講中に受講生にとってやや異質とも感じられる総合的文化内容を並行的に学ぶ授業であったが、テニス技能に影響を及ぼし技能低下を起こすことはなかった。

## V まとめ

本研究は、文化総合性を内容とした授業の可能性を検討するものであった。実験授業の結果、以下の点が示唆された。

- (1) 総合的文化内容を教科内容として設定することにより、体育・スポーツに関わる多くの領域を学ぶことができる。ただし、健康・体力・保健に関しては「保健体育理論（講義）」で補足する必要がある。
- (2) 教科内容の理解と技能に関しては高い到達度を示したが、到達点に関しては検討の必要がある。
- (3) 受講教材の説明・実践力は一般の大学体育よりやや低くなる。
- (4) 高校までに未修得であった内容の補習教育をある程度可能とする。

## 文 献

- 伴義孝（2005）大学における体育の必要性。体育の科学，55（9）：676-680。
- 橋本公雄代表（2008）大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発，平成18・19年度科学研究補助金基盤研究（B）。
- 石井秀宗・椎名久美子・前田忠彦・柳井晴夫（2007）大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討。行動計量学，34（1）：67-77。
- 石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木規夫・荒井克弘・大竹洋平（2005）大学生の学習意欲と学力低下に関する教員の意識についての調査研究。大学入試センター研究紀要，34：19-58。
- 出原泰明（1999）体育に必要な「知」とは何か。体育科教育，47（15）：13-16。
- 菊幸一（1999）スポーツの歴史とスポーツ文化。体育科教育，47（15）：32-33。
- 松岡信之（1999）大学改革の中の保健体育科目。大学時報48（269）：90-95。
- 丸山真司（2002）高校体育のカリキュラムづくりの課題。体育科教育，50（1）：42-45。
- 森敏生（1999）新学習指導要領下における体育の学力と大学体育の課題。大学体育，70：25-30。
- 文部科学省高等教育局大学振興課（2008）大学における教育内容の改革状況について。文部科学省報道発表（平成20年6月3日）：6-7。
- 中村敏雄（1997）冷戦体制化の実践からの脱皮と文化変革論的必修論。体育科教育，45（4）：74-77。
- 則元志郎・西田明史・水月晃・柿原一貴・笠井妙美・田中靖久（2009）大学体育における知識・能力の形成—大学入学時における保健体育教科の知識・実践力の実態と大学体育の課題—。熊本大学教育学部紀要（人文科学），58：21-30。
- 私立大学情報教育協会（2008）授業で直面している問題点。平成19年度私立大学教員の授業改善白書：1-6。
- 全国大学体育連合研究部編（1995）大学体育の展開—授業実践・シラバス—，65-72。